山崎郷土研究会報

No. 57

56.6.30

兵庫県宍粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話②2000

近世初頭の山崎藩（十七）

島田　清

二、池田輝澄時代（続十六）

○　池田家の家中騒動（3）

4. 騒動勃発の素地

—池田家一統の動静と藩主輝澄の発病—

何事でも、起こるのにはそれだけの素地がある。山崎藩池田家（松平家）の家中騒動も、それの起こる素地はその前にできていた。しかし、それを未然に防ぎ、問題点を取り除くように施政を進めることもできるわけで、名君・賢相などいわれる指導者が出れば問題なく終ることもできる。反対に、凡庸なもの、或は、何かの事故でそうした状態を脱却できなかった場合は破局を見ることとなる。山崎藩の場合は、後者に該当した。不幸なことであるが、いたしかたないことといわねばならぬ。

では、その〃素地〃というのは何であるか。一言でいえば、「藩主輝澄の発病」である。

さきにも述べたごとく、輝澄は、河合又五郎一件に関してなみなみならぬ骨折りをしたし、さらに、幼い甥の鳥取藩主松平光仲の藩政をもみて、一族間で重きをなす地位にのし上っていた。東照神君の外孫として重視された忠継・忠雄がいづれも若死した結果、輝澄がそれに代

目　次

近世初頭の山崎藩（十七）……島田　清……一
「八幡宮」物語り……根岸元彦……五
石の声……夜泣石……（朝日新聞提供）……九
疎人氏の句碑建立に憶う……伊藤親保……一〇
昭和五十六年度春季研修旅行見聞記……研修部　長田重男……一一
事務局だより……一三
編集後記……伊藤記……一三

る位置を占めるようになったわけである。

寛永九年（一六三二）、輝澄は、就封許可の謝礼を述べるため、西ノ丸へ登城した。このとき、秀忠は病中であったが、取次阿部対馬守をもって〝輝澄に逢いたい〟とのことばがあり、寝所へ召された。そして、

〝将軍ヨリ、在所へ暇ノ由。其方事、将軍宜ク被思。其方仕合ニテ有リ。追付、被呼ニテ有リ。〟

（『存採叢書』）

と、直接のことばを賜わった。輝澄は謹しんで承服し、退出した。このとき、老中よりも内証があって、

〝勝五郎（鳥取藩主松平光仲）幼息のこと、因州城下へ参り、諸事仕置など、見分然るべき。〟

といわれた。

このことは、「此段、輝澄御物語」の割註を付けて『存採叢書』の「寓簡」所収「池田輝澄之記」に載せられているのであるが、年時に、整合しないものが見受けられる。すなわち、『存採叢書』では、寛永九年四月、西ノ丸へ登城したことになっているが、秀忠は正月二四日に薨去している。したがって、〝四月〟に面謁することはあり得ないわけで、これは、「正月」の誤記か、筆写の際の誤りであろう。言いかえると、輝澄が西ノ丸へ登城して秀忠に暇乞をしたのは寛永九年正月で、そのとき、秀忠より優渥な詞を賜ったものと考えられる。

なお、このときの秀忠の詞は、『存採叢書』収載のことばだけでは少しわかりにくいと思うので、砕いて書きなおしておこう。

〝将軍（家光）より、在所（播州山崎）へ帰ってよい、との許可をいただいたそうだな。（結構だったなあ）その方（お前、輝澄）のことは将軍がたいへんよく思っている。（好感をもっている。好もしく思っている。）仕合せだよ。追付（やがて）、呼び出されることになろう（吉報を待っているがよい。）〟

山崎銘菓さつき
御菓子司
あらき
さつき通・TEL②0170

新将軍家光は秀忠の嫡子で、元和九年（一六二三）、将軍になったばかりである。輝澄は、秀忠の妹、督姫の第三子、家光の従兄弟にあたる。督姫は、長男忠継の死んだと同じ元和元年（一六一五）に病歿し、忠継のあとは二男忠雄が継いだ。この時点における池田家一統の勢力を表示すると、姫路城には利隆が四十二万石で治し、岡山城には忠雄が三十二万石で居住した。また、その弟、輝澄・政綱・輝興は、それぞれ宍粟郡（三万八千石）・赤穂郡（二万五千石）・佐用郡（二万五千石）の領主となり、播磨・備前の両国は総べて池田家が領有していた。

翌元和二年、利隆が病死し、光政が遺領を相続したときもこの体制はかわらなかった。しかし、元和三年、大規模な異動が発令されて情勢は一変した。すなわち、光政は三十二万石に減封されて因・伯二国に移され、池田家の主要領地が近畿の外縁へ移った。これは、大阪の役が終り、池田家の勢力をこうした方面に使う必要がなくなったためで、重要な播磨の地は譜代の有力者で固める、という方針が打ち出されたのである。西播の宍粟・佐用・赤穂三郡には、なお、池田三家が残っているが、大勢に影響するほどのものではない。慶長五年（一六〇〇）に輝政が播磨全国を与えられ、ついで備前・淡路を幼い忠継・忠雄に与えられた時代の情勢と、元和三年移封時の情勢とでは、はっきり、断層のできていることがわかるであろう。

寛永三年（一六二六）、秀忠・家光父子は打揃って上洛した。池田氏の一族もこれに随従し、八月一九日、加恩の沙汰を受けた。すなわち、鳥取藩主光政は少将に進み、岡山藩主忠雄は参議、正四位下に、山崎藩主輝澄は侍従、赤穂藩主政綱は従四位下に、佐用藩主輝興は従五位下、右近太夫に任ぜられた。そして、九月六日の後水尾天皇二条城行幸には、一同騎馬で供奉した。輝澄は乗馬が得意であったらしく、このときも乗馬を叡覧に供し、秀忠より鎌倉助実の腰物、家光より判守家の腰物を褒美として与えられている。

池田家は、この時点で、一応の安泰を得た形となった。しかし、五年後、早くも不幸が訪れた。それは、赤穂城主政綱の病歿である。年齢わずかに二六歳。嗣子もなく、跡は断絶した。幕府では、所領を兄忠雄に返し与えるよう定めたが、忠雄は、輝澄・輝興二弟の所領が少いため、

和洋酒・御進物
㈱イナダ
さつき通・TEL②0209

それへ加賜されたいと願い出た。このため、輝興には一万石を加え、三万五千石として赤穂城へ移し、輝澄には佐用郡の三万石を加えて六万八千石とした。ここにおいて、輝澄の封禄は、姫路・明石に次ぐ播磨第三位となった。

この前年の寛永七年、池田家では芽出たいことができた。それは、忠雄の正室、蜂須賀至鎮の女に嫡子が生れたことである。忠雄は喜んで、自分の幼名勝五郎を名乗らせた。のちの光仲がこれである。国元の岡山でも、嗣子誕生を祝う祭りが盛大に行われた。ところが、その最後の日、河合又五郎が渡辺数馬の弟源太夫を斬殺した。さきに述べた荒木又右衛門登場の仇討事件の発端である。世の中はなかなか思うように進まない。楽しい筈の世子誕生祝賀会が、一転してこのような大事件を起こそうなど、誰が予測したであろう。

岡山藩主忠雄は、犯人河合又五郎を捜索し、久世・安藤・阿部の旗本三人衆にかくまわれていることを知ると、強引に引渡しを要求した。老中たちも、事件の背後に、大名対旗本の反目、抗争という重大問題を控えているため、容易に決着をつけない。時日はいたずらに遷延して八年が暮れ、寛永九年の春を迎えた。

この年は、池田家にとって、また、大変な厄年となった。正月二四日、忠雄と伯父・甥の間柄にある前将軍秀忠が薨じた。五十四歳であった。次で、四月三日、忠雄が疱瘡にかかって急逝した。享年三十一歳。嗣子勝五郎はまだ三歳である。臨終に当って、又五郎の討取を厳命し、「首を墓前に供えよ」と遺言したのをみれば、死んでも死にきれぬ思いであったことがわかろう。数馬の姉、みねの夫である荒木又右衛門の助太刀で、渡辺数馬が河合又五郎・同甚左衛門・桜井半兵衛等を討取ったのは寛永十一年（一六三四）十一月七日、事件発生後四年半のことであった。

話を寛永九年のはじめに戻そう。西ノ丸の前将軍秀忠に帰国の挨拶をした輝澄は、退出後、行列を整えて領国山崎へ帰った。久しぶりに見る播州の風物は、江戸や東海道の賑わいと違い、静かで、野趣に富んでいた。輝澄は、暫く藩政を見たが、六月に入ると因幡へ出発した。甥の鳥取藩主光仲を訪ね、その藩政を見るためである。

時計・ぬがね・宝石
津村時計店
中央通り・TEL②0355

山崎より鳥取へ行くのは、因幡街道によらねばならぬ。山崎を出ると揖保川に沿って遡り、曲里から西北へ進んで戸倉峠にかかる。ここは、播磨の最奥端、秘境の一つである。しかし、播磨・因幡を結ぶ道路としては唯一のものであるため、現在は、国道二九号線として整備され自動車も頻繁に通っている。輝澄一行の行列が通ったときは、文字通り羊腸たる道であったろうから、随分、骨が折れたに違いない。峠を越すと、間もなく若桜に着く。ここから、八東川・千代川に沿って下れば鳥取城下へ出るわけだ。戸倉峠から鳥取まで六〇キロ、山崎から戸倉峠まで五〇キロ、合せて一一〇キロの大旅行であった。

鳥取城下における輝澄はなかなか多忙であったらしい。公式命令である「諸事見分」というのは藩政全般の監査であるから、不都合なところは改めさせねばならず、不充分なところは指導してやらねばならぬ。端に領内の政治だけではない。例の河合又五郎一件を片付ける活動も輝澄が骨折らねばならなかったので、これについての連絡・打合せもいる。しかし、藩主光仲はまだ幼児だ。輝澄は、家老の荒尾内匠と万事を協議したのであった。

使命を終えて、輝澄が山崎に帰着したのは七月も半ば近かった。ちょうどこの頃ー七月中旬ー江戸より急飛脚がきた。出府を命ずる奉書の到来である。これに、「内証」として「駿河十八万石と、甲州のうちの六万石を添えて駿府城を預ける」旨が記されていた。そして、出府の道中行列も、こうした事情を含んで取り計らうよう注意書が添えてあった。輝澄は、一躍二十四万石の大名になるのである。東照神君の外孫であり、将軍家光にも好感をもたれていたということが、こうした形で実現されるとはよくよくの仕合せ者である。

ところが、これが、一転、実現せずに終ってしまった。〝人間万事、塞翁が馬〟とはよく言ったもの、輝澄は喜びを内にかくして江戸への旅に出たのであるが、途中、発病して遂にこの幸運を取り逃がす羽目になったのである。

「八幡宮」物語り

根岸元彦

このたび、この郷土研究会誌を従来の編集方針から変えて、少し趣きの異ったものにしたらどうかというわけで、新に編集長格になられた伊藤親保先生の主唱の下に、先日第一回の編集会議といえるものが催された。

その席上、余り固苦しい学術的な記事ばかりでなく、一般にも読み易い記事も載せたらどうかという話しになり、わたくしに対して、くだけた読み物風のものを書けとのことである。多少押しつけ気味の感はないではなか

ったが、まあ指名されれてみればそれも仕方のないことなので、一応お引き受けした格好になりました。

わたくしは以前、小説集を出版したことはあるのですが、この会誌のような紙面に向く記事を書いたことがない。そこで色々と迷った挙げ句に、わたくしの職業が神職である関係上、現在奉仕している「八幡神社」というお宮について、少し随筆風に、一般の読者にも興味をいだいてもらえるようなものを、書いてみようと思いついた次第です。

ついては、その時頂戴した一宮町の文化会議の機関誌に、播磨一の宮「伊和神社」の安黒宮司が書いておられる「伊和神社記」を読んでみた。これは豊富な資料を基にした、非常に専門的な学術記事といえる論文です。これはわたしなどの関係のある者にとっては、大変興味のある、貴重な労作なのですが、どうも一般の人々には少々難解な点があるのではないか、という気がしたのです。

株式会社
安井書店
宍粟郡山崎町山崎90
TEL山崎②0700(代)

そこでわたしはこの点にかんがみて、もっとくだけた風な、つまり、日本の神道なり又神社なりについて関心はあるのだが、どうもよく分らないといった、大多数の人々を対象にして書いてみたいと思ったわけです。

まず手はじめに、「八幡神社」というのはどんな神様が祀ってあるのかというと、御祭神として人皇十五代「応神天皇（おうじん）」を主神とし、その父神の「仲哀天皇（ちゅうあい）」と母神の「神功皇后（じんぐう）」の三柱の神様を合祀したお宮です。この三柱の神々は日本史上有名な、三韓征伐に関係のある神様ですが、その為に後世「武」の神として崇められるようになりました。

八幡宮の発祥地は、その朝鮮半島へ向けての出発地になった北九州にある「宇佐神宮」とか「筥崎（はこざき）八幡宮」となっています。これらのお宮の名前はすでに、古代に書かれた「続日本記（しょくにほんぎ）」という本の「天平」年間（七三〇年代）の所に書かれております。それが清和天皇の貞観二年（八五八年）に京都の「石清水（いわ）（男山）八幡宮」として迎えられ、更に「後冷泉天皇（ごれいぜい）」（一〇五〇年）の時代に、源氏の先祖で、源義家の父頼義によって、鎌倉の地に「鶴岡八幡宮」として迎えられ、宇佐八幡と共に日本の三大八幡宮と言われるようになりました。

特に石清水八幡宮は、古来皇室の尊崇篤く、「加茂神社」と並んで伊勢神宮の次に位し、日本の三大社と称さ

れた名社です。後世源氏の一門が、氏族の総氏神として信仰した為に、武の神様としての名が高くなりましたが、時々わたくしは人から「八幡様は八幡太郎義家を祀ってあるのか」と訊かれてびっくりすることがある。まあ一般の人の考えはこんなものかと思って納得するのですが、元々は今までの記事でお分りの通り、上代の日本に最高の繁栄をもたらせた応神天皇の遺徳を称えて祀られたお宮です。

なぜ最初に北九州の筑紫（つくし）に祀られたかというと、神功皇后が朝鮮半島で「新羅（しらぎ）」の国を攻められた時、応神天皇をその腹に懐妊しておられ、九州に還られた時にその地で産まれたからで、その為に応神天皇は「胎中天皇」という別名もある。つまりすでに皇后の腹の中で、父の仲哀天皇の後つぎとなっておられたということです。この時仲哀天皇は死んで亡くなっておられたのです。「その在位四十一年、この間、国富み兵強く、また大陸との交通にて学術技芸盛んに伝来し、国威の宜揚せしこと前古にその比を見ず」と昔の本に書かれてあります。

戦前の歴史教科書で教えられた、百済（くだら）の博士「王仁（わに）」が論語や千字文を献じ、わが国に初めて文字、つまり漢字が伝来したと言われたのはこの天皇の時です。戦前の歴史は皇国紀元すなわち皇紀を取っていたので神武天皇即位以来この年が一二一二年でした。年輩の人なら当時の学校で「クダラのワニが論語をくわえておいちに、おいちに（一二一二）とやって来た」など言って文字伝来の年号を覚えさされたことを思い出されると思います。

またこの帝は大変長生きな方で、日本書紀では百十一歳、古事記では百三十歳で亡くなられたと書いてある。御代の栄えた証拠には、河内の国にあるその御陵（みささぎ）つまりお墓は、有名な大阪にある仁徳天皇の御陵につぎ、日本第二の規模を持つ大きさです。

神功皇后については、その忠実な大臣である武内宿祢（すくね）に扶けられ、女性ながら男装して独力で大軍を率いて朝鮮半島に渡って戦われたと伝えられ、学者によっては今論争の的になっている、耶馬台国の女王卑弥呼（ひみこ）であると言う人もあり、仮空の人物であるという人もある。だが先年わたしが大阪市の住吉大社（神功皇后を祀った宮）の招きで、奈良県にある皇后の御陵に参拝した時の記念講演で、東

マックスファクター
化粧品・毛糸・袋物
さどや
さつき通・TEL②0337

北大学の名誉教授である今泉澄博士は、絶対に実在の人物であると強調されていました。住吉大社は皇后が新羅征伐の為に船出をされた所に建てられたお宮で、今では大阪市街地の真ん中になっていますが、当時は「住の江」といって、大阪湾の海岸だったわけです。

八幡宮という神社名（訓読みでは「やはたのみや」）はどうしてつけられたかということについては、色んな説があってはっきりしませんが、この文字だけの意味を考えてみますと、「八」は古来日本語の数詞では数の多いことを表わし、目出たい数字となっています。八重桜とか、八百万とか大八州とか八百屋とかはすべてこの意味です。

又、「や」という発音は、「いや」という言葉のつまったもので、「いや」は後に「いよ」と変ります。つまり現代語の「いよいよ」という言葉で「愈々益々」という目出たい言葉なのです。古語では「弥」という文字を当て、これを「いや」又は「や」と発音して「弥栄（いやさか）」という風に使います。京都の祇園さんで有名な「八坂神社」は、元来「いやさか」神社といっていたのがちぢまったものです。又東山連峰の山すそにあり、次々と坂を登ってお参りするので八坂という文字を当てたものでしょう。

つまり、「八」又は「や」は文法的には美称接頭語といって、敬語の「御」の字や「大日本」の大の字などと同じ用法で、色んな語の頭につけて、沢山とか、いよいよとかいう意味を表わす美称、つまり、ほめ言葉なのです。

「幡」はのぼりのことです。お祭りに「○○神社」と書いたのぼりをお宮の境内に立てますが、あののぼりと同じです。昔源氏や平家が合戦の時に、白や紅の吹き流しを立てましたが、あれも同様です。のぼりについては柳田国男氏の、くわしい民俗学的研究がありますが、とに角見るからに景気のいいものですから、その昔、軍勢が沢山の幡を押し立てて、海を渡って攻めこんだといった風に解釈されたものではないでしょうか。幡の訓読みである「はた」は、現代語の旗に通じ、「はためく」などの言葉の基となります。

少しむずかしいことになってしまいましたが、次には旧山崎町の総氏神「八幡神社」の創建や由緒について書いてみましょう。

美術・工芸・画材
いとう画廊
贈答品に絵画・版画を!!
出水町通り・☎2−0371

56.5.16

石の声

夜泣石

（兵庫県山崎町）

こめられた悲恋物語

めだつ若者のお参り姿

夜泣石というのは各地にあるが、ここのは悲恋物語がこめられていた。山陽と山陰とを結ぶ因幡街道の要所、兵庫県山崎町の日蓮宗妙勝寺の境内に伝わる「夜泣霊碑」がそれだ。

● ノミの跡がはっきり

妙勝寺の門をはいって、すぐ左手に一本の石柱が立っている。高さ一・八㍍あまり。むかし風にいえば一間になろうか。御影（みかげ）石で、荒々しいノミ跡がはっきり残っていて、横から見ると、わずかに反っているのがわかる。そのむかし、山崎藩の陣屋の外堀にかかっていた石橋の橋材に使われていたものだという。

この石橋をめぐって、次のような話が残っている。

ある赤穂藩士の娘が藩の若者と恋仲になったが、双方の親の反対を受け、娘の叔父に当たる山崎藩士のところへ行儀見習いの名目で預けられる。娘は絶世の美人で、山崎藩の重役の息子がいいよるが、娘はもちろん、よい返事はしない。ある日、息子は、この石橋の上で娘を待ち伏せ、殺す。娘は赤穂に残った若者の名を呼びながら刃（やいば）の露と消えた。その後、娘の怨念（おんねん）が橋に残ったものか、夜になると、「赤穂へいのう、赤穂へいのう」とすすり泣いて、村人たちを気味悪がらせた。

藩も、重役の息子の仕業とわかりながら、どうすることもできず、不浄の石橋として、橋を新しくかけさせて、もとの橋の石材は土地の者に与えた。しかし、石材の行くところ不幸が起こり「赤穂へいのう」という泣き声が続いた。といって、殿様から下げわたされた石材だけに粗末にもできず、土地の者は困り果てて、夜泣石と呼んで近寄る人もいなかった。ころして武士の時代が終わって明治に。

● 娘の菩提をとむらう

たまたま妙勝寺の日解（にちげ）上人が本堂の再建を発願していることを聞いた土地の人びとはこの石材を本堂の礎石にでも使ってほしいと、妙勝寺に運びこんだが、秋の彼岸の施餓鬼中に大工小屋から出火、本堂の用材全部を焼いてしまった。明治十八年のことだった。日解上人は石材の一本に「夜泣霊碑」と彫りこんで、境内の一隅に安置して、供養、娘の菩提（ほだい）をとむらった。その後は何事もなく、本堂の下に大半の石材は眠り、「赤穂へいのう」という泣き声を聞くこともなくなった。

山崎藩主は、元和元年（一六一五）池田輝澄がこの地に封ぜられて以来、たびたび家名がかわっているが、延宝七年（一六七九）からは本多家の分家、本多忠英の子孫が代をついだ。物語はこのころのことと思われる。妙勝寺の住職、大岩祥峰さんは「これだけの橋をかけかえたのだから、なにかの事件があったに違いない。山崎藩と赤穂藩とは川筋も違い、国を接していたわけではないが、人的交流はあったようだ」と語る。

● コケ生えず真新しく

それにしても「夜泣霊碑」は、コケも生えておらず、真新しくみえる。伝説を読んで、お参りにくる若者の姿も少なくない。だれが供えたか、碑の前に花がかざられていた。妙勝寺の境内はいま、青葉の季節である。

（朝日新聞提供）

横からみると「夜泣霊碑」は弓なりに反っていた
＝兵庫県山崎町の妙勝寺で

疎人氏の句碑建立に憶う

伊藤　親保

昭和五十五年秋正に酣の十月、わが町を見おろす景勝の地、篠の丸公園の中腹に、高さ一・二メートル、横一・五メートル、厚さ五〇センチの花崗岩の一基の句碑が完成した。

当町では、本多藩下十八世紀末の寛政年間には、青蓮寺の僧四睡庵素練に依って俳諧の聯がつくられ、俳句・和歌など韻文学は小藩にふさわしい文化的土壌に育っていたようである。特に明治三十年前後から大正期にかけての日清・日露の戦勝、第一次世界大戦は、山の国宍粟商圏の中心地として経済的にも栄え、そのゆとりか俳人が続出した。八幡神社や総道神社の献額には私たちより一・二まわり先輩の金井銀玉・安井竹軒・福井託字・志水浩一郎・本条虚風・原田劉志・前野九旦子等の故人や先輩名に親しさを感じ、又冠吟では原田竹明・松原三保・馬場馬近・内海古舟・建部紫草等の面影も懐しい。その献額の光風会名は、昭和に入って「青嶺句会」がその系統を引継ぎ、和田疎人氏が主宰されている。又当時の役場は文化性も高く岩魚句会も活躍したようである。短歌の方は昭和に入って、旧高等女学校の教師で歌人であった安田青風の育成を受けた歌人が多く輩出し、現在は「山崎歌話会」として五十年近い歴史を誇っている。

然し、私たちの町には句碑・歌碑等の建立が見られない。全く意外の感が深い。竜野市に於ては文学・詩句歌・頌徳等々三十数基の碑が、鶏籠山麓遊歩道に散在し、文学の径・哲学の散策路として紹介され深さと重さを感じる。五万石と一万石の人物や経済の背景差だろうか。

私は、今回和田疎人氏の句碑が建立された、意義の深さを感じている。その句碑は高浜虚子の流れを汲む「九年母」主宰の五十嵐播水の高弟でその結社の同人であり、推せん作家でもある、我が町の産んだ私達の俳人和田疎人氏の「麦笛や夕靄町の灯を包む」の大正期の幼き頃の想い出を詠まれた、自筆の一句が刻まれている。

建立発起人は山崎町須賀沢の猪尾月峰氏外発起人会の四氏で、賛助協力者には疎人氏が主宰する「青嶺句会」

や指導する「山脈句会」の会員をはじめ、疎人氏の朋友・知己・一門等百三十名が名を列ねている。

山崎町文化連盟では数年前より、町民の文化性を高め情操陶冶の一助にもと、篠の丸公園より埴尾神社を経て八幡神社に至る、山麓沿いの小径に、文化の香高い文学碑や頌徳碑や彫像と、文学や美術や思索の遊歩道の計画を陳情し続けている。

この疎人氏の句碑の完成により、学制発布当時の漢学者の福原謙七先生の頌徳碑や、前野道素翁の道歌碑も所を得、山崎町の文学や思索の小径の出発点は定まったようである。

自治の町づくりとは、福祉も文化に含めた、教養や人間味のある思索の深さや、文化の重さを感じる環境づくりが大切である。

漢方薬と食事指導

株式会社 ドラッグストアー ひがしや

山崎町中央通り・TEL ②0109

昭和五十六年度
春季研修旅行見聞記

研修部　長田重男

春の研修旅行の行先をどこにしようかということで、研修部のみなさん、地区幹事のみなさんと数回の会合を重ね、俗化していないところ、会員の皆さんがあまり行っていないところを重点に検討した結果、奈良の若草山ドライブウェー、国立博物館、法華寺、秋篠寺、平城宮趾ということになった。

募集してみると七十名を割りそうなので役員の皆さんに再度依頼勧奨してもらって九十二名になってひと安心、安井事務局長の綿密周到な手配もととのい五月十日を迎えた。五時すぎから続々集合、一名のみ欠席で九十一名、二台のバスで出発、朝方天気も心配されたが八時すぎには全く回復し一行を安心させた。途中赤松で休憩し一路奈良に向う。以下見学記

一、若草山ドライブウェー：：最近開発されたということであったが、そんなに新しくない感じ。奈良市の真中にこんなところがあるのかと思うような雑木の自然林の中を車はつづら折れの道を右に左にカーブし、われわれをひやひやさせながら登る。運転手さんの苦労に感謝、

終点というところで下車、見晴しもきかないしこまったなと思いつつ徒歩で二百米登ると視界が一瞬ひらけ奈良市街が一望の下に眺められる展望台に出た。不安と焦燥が一気に解消して全員が快哉を叫んだ。東大寺、県庁、興福寺その他が何一つさえぎるものなく望見された。通行料金一七〇〇円であったが来てよかったと思った。

二、国立博物館：：昼食のあと徒歩で博物館に向う。かねて宗教先覚者の彫刻、絵画展が開催中とのことでスケジュールに入れた。わが国はもちろん、中国仏教界の哲人、先覚者の仏像、絵画が日本各地の寺院、博物館、個人の所蔵にいたるまでよくぞこれまで集めたと感歎される豊富な資料が本館、新館にぎっしりならべられていた。幾多の仏者のそれぞれの特徴のある顔が今でもまぶたに浮ぶ。

三、法華寺：：光明皇后が総国尼寺として建立された寺であるが、その奥庭園が公開されている―春秋各十五日間―ということで見学の中に入れた。寺はさほどに大きなものではないが、庫裡から眺める庭園はすばらしい。本堂の十一面観音は光明皇后をモデルに天竺の問答師が刻んだ美女像ということで心はずませて本堂にはいると扉はかたくとざされて見られない。

四、平城宮趾：：七代七十年咲く花の匂う如しと誇った平城宮も平安遷都以来一三〇〇年、建物、敷石あとかたもなく水田になったのであるが、昭和三十四年以来発掘調査が進められ、平城宮趾整備地として建物趾に芝生、柱の位置に木を植えてあるが、奈良平野の真中に何百ヘクタールも買上げ今尚発掘調査しているこの事業の規模の雄大さに驚いた。

五、秋篠寺：：寺の名もゆかしくそれにも増して美しい伎芸尺にあこがれて訪ねる人も多いという秋篠寺でまず感心したことは広い寺専用の駐車場のあったこと、門をはいるととても広大な境内、狐や狸も住みそうな雑木、竹林、たびたびの兵火で堂塔の大部分を焼失したと記されているがもの淋しい、ゆかしい古寺であった。本堂の中の伎芸尺は薬師三尊の脇侍として立っていた。首をかしげ腰をひねっている姿は仏像というより濃艶な女人の匂いを感ずる。

まとめ：：一、三、五はふだんあまり人が訪ねない手あかのつかん、個人では行きにくいという点でわれわれの

楠風閣
農協会館 } 結婚式場指定店

証明写真・カメラ・カラープリント

堀口写真館

山崎中央商店街・☎②0934

目的はおおむね達せられたように思った。はじめにも書いたように安井事務局長の綿密周到な手配と役員の皆さんのご協力、参加された九一名のみなさんのおかげで楽しくしかも有益な研修旅行ができたことを感謝して見学記を終ります。

事務局だより

一、会員の倍増運動を実施しておりますのでご親戚、知人の方で未加入の方に郷土研究会ご入会をお勧め下さい。

二、本年度、史跡標柱は左の三基を建立いたしました。

1. 篠の丸城跡（門前～上寺　登山道路合流点）
2. 山崎藩桜の馬場跡（山崎小学校南側　崖下）
3. 山崎藩御倉屋敷跡（宇原、上林建設事務所　南側）

三、機構改革により郷土研究会事務局は左記になっております。ご連絡、問い合わせは左記へどうぞ。

山崎町出水町　安井清介宅
TEL　②　一〇一四

以　上

編集後記

伊藤　記

会報発刊の新陣容がきまりました。地方の時代とか、一層のふる里への廻帰のため、町づくりに人づくりに、内省と建設の糧を求めたく思います。

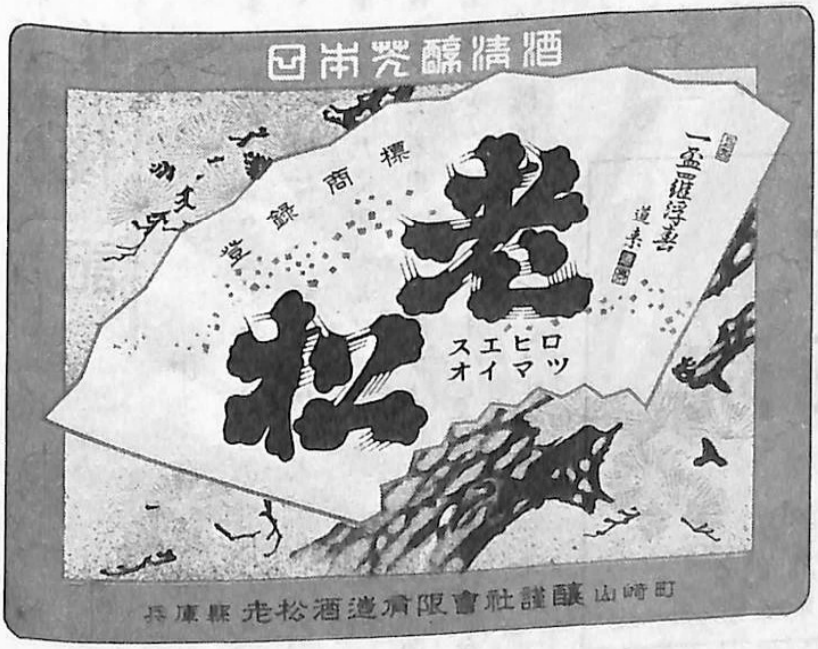
会員の皆々さまのふる里への自然や人情や風物の「語りの場」への会報にと存じています。ふるって御投稿をお願い申します。原稿は伊藤宅へ。TEL②〇三七一。

◎会報編集委員

浅田耕三
伊藤親保
大谷司郎
片山昭悟
下村憲一
根岸元彦
安井道夫
和田秀男

外科・内科
山中医院
院長　山中陽一
山崎町西町・TEL②0036

清酒
山陽盃
SANYO-HAI
兵庫県山崎町山崎
山陽盃酒造有限会社


酒清醸醪
商標登録
老松
ロウエ
スオイマツ
兵庫県 老松酒造有限會社謹醸 山崎町